

三番瀬埋め立て計画 野鳥誌掲載記事

<三番瀬計画策定懇談会「休止」強行 101ha 埋め立て案に山積みする課題>
(No.629 2000年3月号 p.26)

<千葉・三番瀬の埋め立て見直し案公表ーさらなる縮小へ>
(No.623 1999年8月号 p.39)

<千葉県主催 三番瀬の埋め立て計画を考えるシンポジウム>
(No.620 1999年5月号 p.40-41)

<三番瀬埋め立ての根本的な見直しをー千葉県の計画策定懇談会の動き>
(No.619 1999年3/4月号 p.44-45)

● <活動>

三番瀬計画策定懇談会「休止」 101ha 埋め立て案に山積する課題

(No.629 2000年3月号 p.26)

暮れも押し迫った昨年12月25日、千葉県による第4回目の「市川二期地区・京葉港二期地区計画策定懇談会」が開かれましたが、多くの議論を積み残したまま、懇談会の「休止」が一方的に宣言されるという事態となりました。これは、(1) 以後基本的には会合を開かず、県が今までの懇談会での議論と委員の最終的な意見をとりまとめ、県知事の諮問機関である「千葉県環境会議」に答申する、(2) 懇談会自体は企業庁からの報告を随時受けて推移を見守る、というものです。

■唐突な「休止」

懇談会の席上では、昨年6月に公表された101haの埋め立ての必要性に対して、検討不十分として委員から多くの異論が出され激論となりました。委員として参加した金井裕本会研究センター副所長からは、

- ◆埋立地の土地利用計画の必要性、特にまちづくり支援用地について、新しい材料に乏しく、説得力がない。
- ◆下水処理場の代替案は、「実行は困難」との言葉が並ぶだけで、埋め立てを回避しようという努力が感じられない。
- ◆鳥類への影響が少なからず予測され、101haは十分な縮小とは言えない。
- ◆道路については事業主体（県か建設省か）が不明なため、構造として高架式か地下式なのかが決められず、影響予測の段階に達していない。
- ◆三番瀬を含むまちづくりについて、県民の意見を聞く場を設けさらに議論をすべき。

といった意見を強く主張しました。他に海洋生物学や生態学、都市計画の専門家の委員の方々からも「埋め立ての必要性について議論すべきデータが不足している」といった意見が相次ぎましたが、スケジュールを急ぐ県側に押し切られた形となりました。

■課題は山積み

この懇談会は県知事の諮問機関である環境会議（常設）が県に出した課題に従って、三番瀬に関する環境の調査（補足調査）の結果を受け、埋め立て計画の見直しについて一昨年10月以来、4回の検討を行ってきました。様々な分野の専門家が事業の計画段階で科学的な議論を行ったことは、評価できることです。補足調査では6億円もの費用をかけて、底質、青潮の発生機構、底生生物や鳥類の生息状況などの調査が行われ、これに基づいて、埋め立て計画案は740haから101haに縮小されるにいたりました。また本会他が当初に行

った「会議を公開し、県民に情報を知らせるべき」という主張は、部分的ですが実現し、会議録や資料の一部をインターネットで公開、意見を募集するといったことが実現しました。

一方で環境会議から課せられ、本会等も主張した計画の必要性に関する議論は、前述のように全く中途半端です。補足調査で自然科学の情報を整理し、議論の土台をつくったの比べると、下水道処理、再開発、道路の混雑解消、海とふれあえる環境づくりといった都市計画の問題は、その解決のために埋め立てが必要かどうかという結論を導くほどの客観的な材料は全く不足しています。また、多くの県民の関心事となった今にいたっても、県民主体の計画策定を行う道筋は全く見えていません。

■三番瀬の保全に向けて

千葉県は、環境会議や計画段階の論議という先進的なしくみ、あるいは三番瀬の重要性を踏まえて、さらに議論を尽くすべきです。結論先行の 101ha 埋め立て計画を環境会議に出したとしても、このまま容認することはできません。

本会は、「埋め立て計画の必要性を多方面から徹底的に再検討し、浅瀬・干潟を最大限残すべき」という原則に立ち、大所高所からの幅広い議論の実現を求めています。（自然保護センター 古南幸弘）

千葉県企業庁 三番瀬埋め立て計画と計画策定懇談会資料

<http://www.pref.chiba.jp/syozoku/kigyousanbanze/index-j.html>

★三番瀬：

千葉県の市川市と船橋市にまたがる干潟・浅瀬。総面積約 1200 ヘクタール。干潟面積の 90%が埋め立てられた東京湾に残った最後の干潟の一つ。シギ・チドリ類をはじめ、多くの野鳥の生息地となっており、レッドデータ種としてホウロクシギ、コアジサシなど 5 種、またラムサール条約の登録地基準を満たす水鳥（個体群の 1%以上が渡来）はミヤコドリ、ハマシギ、スズガモ等 20 種を数える。環境庁（1997）の「シギ・チドリ類渡来湿地目録」では「船橋海浜公園」・「塩浜」の名称で重要渡来地に挙げられている。ラムサール条約登録湿地の谷津干潟との間で鳥類の行き来が確認されており、両所一体となった保全が必要。

★101ha 埋め立て案：

市川市側 90ha には、まちづくり支援用地（再開発のための移転用地）、公園緑地、下水道終末処理場、道路・漁港・護岸用地、船橋市側 11ha には公共埠頭・港湾関連用地・緑地等が計画されている。これ以外に、人工海浜 13.2ha が加わる。さらに第 2 東京湾岸道路を通すことが想定されている。

● <活動>

千葉・三番瀬の埋立見直し案公表 — さらなる縮小へ

(No.623 1999年8月号 p.39)

東京湾奥部に残された水鳥の有数の渡来地である三番瀬（さんばんぜ）の埋立計画見直しを進めている千葉県は6月9日、埋立面積を101ヘクタールに縮小する案を公表、19日に第三回「市川二期・京葉港二期計画策定懇談会」を開催して、有識者、地元団体等に諮りました。

この見直し案は、住宅地やゴミ処分場、港湾施設のほとんどの用地を削る等、元計画を7分の1以下にまで縮めたもの。しかし、計画規模縮小で陸上に確保が見込めるはずの下水処理場の建設など、疑問のある用地計画がなお残されています。また埋め立て地内を通る第二湾岸道路は、三番瀬の中で最もシギ・チドリ類が多く、市民の憩いの場でもある船橋海浜公園の干潟域のすぐ横を高架で通過する計画になっています。本会は17日、不要な用地の見直しの徹底や道路の地下化等を知事に要望、懇談会でも委員として意見を述べました。

次回懇談会は8月開催の見込み。なお批判の多い見直し案のさらなる縮小と、干潟・浅海域の保全に向けて、大きく世論を喚起して行きます。（研究センター 金井裕／保護・調査センター 古南幸弘）

● <活動>

千葉県主催 三番瀬の埋立計画を考えるシンポジウム

(No.620 1999年5月号 p.40-41)

3月6日、千葉縣市川市で、シンポジウム「自然と地域と人との共生をめざして」が開催されました。現在、三番瀬の埋め立て計画の見直しを進めている千葉県が主催し、行政、漁業者、自然保護のそれぞれの立場の人々が参加して意見交換を行いました。

パネラーとして出席した本会千葉県支部幹事の田中利彦氏は、まずは環境への影響の回避、低減を十分に検討し、人工干潟の造成等による代償措置については、それでも影響が避けられない場合に考えるべきであると指摘しました。これは、6月に施行される環境影響評価法にも検討の手順として定められています。行徳の自然に親しむ会の町田恵美子氏は、既に都市計画で決定された土地があるにも関わらず埋め立て地に建設するとされている下水処理場などについて、土地利用と埋め立ての必要性を見直し、代替地の検討を確実にを行うことを求めました。三番瀬フォーラムの小笠尾精一氏は、都市に対するニーズが多様化していることについて述べ、計画の抜本的な見直しを訴えました。

千葉県企業庁の佐藤健課長は計画見直しの方針として、なるべく既存の土地で対応すると述べた上で、下水処理場・港湾施設・第二湾岸道路についてはやはり埋め立てが必要であると発言しました。また、パネラーや会場からのシンポジウムの連続開催を求める意見に対しては検討すると答え、ホームページ等で随時意見を募集していると述べました。

今回のように県が市民との意見交換の場を設けたことは評価できます。けれども、各事業の必要性を具体的に説明する資料は示されず、根本からの計画見直しを求める保全団体と、計画の一部を縮小してこと足れりとする県の意見はすれ違ったままに終わりました。

今後も情報の公開、「共生」についての意見交換の場の継続について求めていきます。(保護・調査センター)

● <活動>

三番瀬埋め立ての根本的な見直しを ― 千葉県の計画策定懇談会の動き
(No.619 1999年3/4月号 p.44-45)

千葉県の市川市と船橋市にまたがる三番瀬（さんばんぜ）は、干潟の90%が失われた東京湾にあって、面積約1200ヘクタールもの干潟・浅瀬で構成された、生きものの豊かに生息する場所です。環境庁の「シギ・チドリ類渡来湿地目録」（1997）にも「船橋海浜公園」と「塩浜」の名称で双方が重要渡来地に挙げられています。

この浅海域を740ヘクタールにわたって埋め立て、港湾施設、住宅地、公園、下水処理場、道路等の用地を造成するという千葉県の計画に対し、見直し作業が行われています。日本野鳥の会は県に対し、三番瀬の貴重な浅海域の保全と事業計画の根本的な見直しを主張しています。

千葉県の「市川2期地区・京葉港2期地区計画」は61年に公表されましたがその後中断。バブル真っ盛りの85年に再開が公表され、93年に知事の諮問機関である環境会議に環境保全対策が諮問されました。環境会議からは95年に「生態系把握のための補足調査を行う」「土地利用の必要性を十分吟味する」という提言が出されたため、3年間にわたる補足調査が行われてきました。

1月に公表された補足調査の結果を見ると、三番瀬にラムサール条約登録地である谷津干潟と同等かそれ以上の価値を認め、また現計画が環境に大きな影響を与えることが示されています。

千葉県は昨年この計画の見直しを表明し、専門的・総合的な立場からの意見を聞くという位置づけで「市川2期地区・京葉港2期地区計画策定懇談会」を10月に設置。懇談会は生活文化、公共経済、都市計画、環境等の専門家、産業団体、地元行政と議会の代表等20人の委員から構成され、環境団体からは本会研究センター副所長、金井裕と日本自然保護協会の開発法子研究部長が出席しています。

2月8日に開かれた第二回懇談会では、三番瀬の重要性と現計画による影響の大きさが委員間で確認されました。

また、事業の見直し方針案が示されましたが、事業の必要性と規模についての資料はわずか数ページで、委員からは詳しい説明を求める声が続出しました。この懇談会は非公開で行われているため、市民に対してもっと積極的に情報公開をするよう、本会を含めた複

数の委員が主張しています。

懇談会に先立つ 2 月 5 日には本会、日本自然保護協会、WWF ジャパンが連名で千葉県知事に対し、計画の根本的見直しと三番瀬のラムサール条約への登録を求める要望書を提出、15 日には環境庁長官にも協力を要請しました。

いま必要なのは、従来からの計画を縮小することではなく、三番瀬をつぶしてまで実施しなくてはならない事業なのかを吟味し、埋め立てを回避する方法がないのかを市民を交えて考えることです。今後とも千葉県支部をはじめとする三番瀬の保全を主張する諸グループと連絡を取り合い、意見をぶつけていきます。(研究センター 金井裕／保護・調査センター 古南幸弘)